

三者協働で得たものと課題

NPO法人東村山子育て支援ネットワークすずめ

千葉 瑞枝

ころころの森は好評です。広く、明るく、清潔な館内。工夫いっぱいの手作りおもちゃや厳選された良質のおもちゃたち。ゆったりとあたたかな雰囲気の中でたくさんのお親子が楽しい時間を過ごしています。日々おこなわれるプログラムはどれも満員御礼。子育て支援者や保育園・幼稚園の先生を対象とした子育て支援講座や学校関係者・老人・障害者施設関係者に対象を広げた世代間交流コーデイネーター養成講座なども夜間の連続講座にもかかわらず定員はいっぱいです。どれだけの反応があるのか心配したジュニアサポーター養成講座も定員がうまり、講座を受けた子どもたちが

ボランティアとしてかかわってくれています。

このようにころころの森が多くの人に支持されるのは、行政・大学・NPOの三者協働の成果である。と胸を張って主張したいところではあります。確かに、毎月発行される「ころころの森だより」は市内の様々な施設に配布してもらっており、情報が隅々にまで行き届いています。地域との連携事業を企画する際、関係所管によって商工会やJA、医師会など関連機関を紹介してもらいスムーズに始めることもできます。また、白梅学園の先生方による講座は質が高く、「これだけの先生達の話聞くことができるなんて、なかなか

かできません」という参加者の声も寄せられています。ワークショップやボランティアとしてかかわってくれる白梅学園の学生たちは、子どもたちの人気者です。利用者アンケートをNPO法人HUGが請け負ったり、リズム遊びやお話会にNPOすずめの保育士が携わったりと事務局運営以外にも様々な事業にNPO法人がかかわっています。

このような例からは、三者それぞれの特性がころころの森の中で上手に発揮されているように見えます。市が環境を整え、NPOが利用者のニーズを運営にとりこみ、白梅学園がその専門性を生かした事業を展開するといふ三者協働の一つの図式が見えてきます。しかし、これが「それぞれの立場や従来の枠組みを超えようとする努力」*1の上に実現しているものなのか、という点、その努力はまだまだ足りないように思えます。

実際に事務局にかかわっているものとして感じるのは、「枠組み」という壁です。事務局は具体的な事業の実施の段階において、市の実施の方法・白梅学園の実施の方法という二つの枠に入ることを求められます。一方のOKをもらっても、もう一方がNGで計画の練り直しを迫られることも少なくありませんでした。利用者のニーズを受け止め、新しい事業の提案を企画しても、いくつもの壁を越えなくてはならず、提

案を躊躇してしまいうこともありました。

この「枠組み」の内容は、個人情報保護であったり、会計の方法であったり、一つ一つはとても重要なものです。しかし、ころころの森はいわば社会福祉施設です。行政機関とも学校法人ともNPO法人とも違います。三通りの枠組みを持つのではなく、ころころの森独自の枠組みを構築していかなくてはならないはずで、それには、いまある枠組みを一度外してみよう「努力」が必要不可欠だと痛感しています。

新たな枠組み作りをしていく過程で、得るものは大きいです。NPOすずめは独自に子育て支援事業を行っていることが多かったのですが、立場の違う行政や白梅学園とのかかわりの中で、コーディネート力が試され、視野が広がっていくという可能性を感じています。また、ころころの森の事業ではないのですが、幼児教室すずめの子どもたちを対象にした白梅学園の学生たちのワークショップが実現し、子どもたちにも、保育士にもいい刺激となりました。協働をきっかけに新しいつながりができ、そこから新たな展開が生まれることはとても有意義で楽しいことです。

2010年、ころころの森では乳幼児の保護者だけではなく、市内の様々な世代の関係者による運営協議会が発足します。今後は地域の拠点とし、多様なニ

ズを取り込んだ事業展開が期待されることでしよう。
三者協働で培うコーディネート力は、地域をつなぐた
めに大きな役割を果たしていくはずです。

*1 地域と子ども学 創刊号 「NPOと協働のありかた」
鈴木千佳子著